武蔵野日曜聖書講筵

光の子

――テサロニケ前書第５章――

１９９２年11月８日
小池辰雄

信行・信交　キリストの再臨　愛の光　上から賜りたるもの　聖霊漬け　霊体を頂いて天界へ
キリストの光　我々は光の子　詩「火の民」

【テサロニケ前５】

1兄弟よ、時と期とに就きては汝らに書きおくるに及ばず。2汝らは主の日の盗人の夜きたるが如くに来ることを、自ら詳細に知ればなり。3人々の平和無事なりと言うほどに、滅亡にわかに彼らの上に来らん、妊める婦に産の苦痛の臨むがごとし、必ず遁るることを得じ。4されど兄弟よ、汝らは暗に居らざれば、盗人の来るごとく其の日なんじらに追及くことなし。5それ汝等はみな光の子ども昼の子供なり。我らは夜に属く者にあらず、暗に属く者にあらず。6されば他の人のごとく眠るべからず、目を覚して慎むべし。7眠る者は夜眠り、酒に酔う者は夜酔うなり。8されど我らは昼に属く者なれば、信仰と愛との胸当を著け、救の望の兜をかむりて慎むべし。9それ神は我らを怒に遭せんとにあらず、主イエス・キリストに頼りて救を得させんと定め給えるなり。10主の我等のために死に給えるは、我等をして寤めおるとも眠りおるとも己と共に生くることを得しめん為なり。11この故に互いに勤めて各自の徳を建つべし、これ汝らが常に為す所なり。

12兄弟よ、汝らに求む。なんじらの中に労し、主にありて汝らを治め、汝らを訓戒する者を重んじ、13その勤労によりて厚く之を愛し敬え、また互に相和ぐべし。14兄弟よ、汝らに勧む、妄なる者を訓戒し、落胆せし者を励まし、弱き者を扶け、凡ての人に対して寛容なれ。15誰も人に対し悪をもて悪に報いぬように慎め。ただ相互に、また凡ての人に対して常に善を追い求めよ。16常に喜べ、17絶えず祈れ、18凡てのこと感謝せよ、これキリスト・イエスに由りて神の汝らに求め給う所なり。19御霊を熄すな、20預言を蔑すな、21凡てのこと試みて善きものを守り、22凡ての悪の類に遠ざかれ。

23願くは平和の神、みずから汝らを全く潔くし、汝らの霊と心と体とを全く守りて、我らの主イエス・キリストの来り給うとき責むべき所なからしめ

給わん事を。24汝らを召したもう者は真実(まこと)なれば、之を成し給うべし。
25兄弟よ、我らのために祈れ。
26きよき接吻(くちづけ)をもて凡ての兄弟の安否を問え。27主によりて汝らに命ず、この書を凡ての兄弟に読み聞かせよ。
28願わくは主イエス・キリストの恩恵(めぐみ)、なんじらと偕(とも)に在らんことを。

●信行・信交

無教会時代には、賀川豊彦というと、

「キリスト教＋社会運動」

というような角度から言われていた。

「そういうことではない。聖書だけやっていればいいんだ」

というのが無教会なんです。ところが、賀川先生は、社会運動なんてことでやったのではない。自然に彼の生活そのものから湧いてきた、全く福音的な活動なんです。そういうことが誤解されている。私はそのことに、全く遅ればせながら、賀川さんという人の偉大さに気が付きまして、非常に感服しているわけです。いかに無教会が観念であるかということ。私はもう「内村鑑三」と余り言いたくない。

福音がいかに本当は行動的なものでなければならないか。

「信仰のみ」

と言ったパウロも、ルターも、もっとも行動的な人だった。そういう意味において、「しんこう」の「こう」は正に「信行」、行うと書かなければダメなんだ。仰いでいたらダメだ。本当の行が出てくるためには、キリストとの霊的な交わりの世界――「信交」という――にいなければダメですけれども。そういうことで、もう古い概念はどしどし棄てて、新しく展開していかなければいかん。信行は信即行の世界です。

「生活そのものをもって証しなければ福音を受けとっていることにはならない」

という、はっきりした自覚を持っていただきたい。

●キリストの再臨

今日はテサロニケ前書第5章です。

1兄弟よ、時と期とに就きては汝らに書きおくるに及ばず。

「時と期」というのは、或(あ)る時期、また、時間の或る時ですね、それから、或る決まった時ということ。後の方が時間的なんで、前の方は瞬間的な時です。

2汝らは主の日の盗人(ぬすびと)の夜きたるが如くに来ることを、自ら詳細(つまびらか)に知ればなり。

とにかく、パウロにしろペテロにしろ使徒たちは、

「キリストの再臨は間近である」

ということを意識して動いていた。大体、新約聖書というのはその次元において書かれた書ですから。パウロになると、少しはズレますけれども、パウロも大体その線です。

3 **人々の平和無事なりと言うほどに、滅亡にわかに彼らの上に来らん、妊める婦に産の苦痛の臨むがごとし、必ず遁るることを得じ。**

「平和無事なり」

というのが、日本人の安価な意識ですけれども、精神的に一番危ないのは日本です。経済大国なんて言ったって、とんでもない精神小国です。今の政治なんていうのは何ごとか。もう、もの笑いですね、情けない。今の青年がそういう事に対する怒りを持たないのは、私は非常に今の若者はダメだと思っている。そういう運動をするくらいな気持を持たないと。

4 **されど兄弟よ、汝らは暗に居らざれば、盗人の来るごとく其の日なんじらに追及くことなし。**

パウロはテサロニケの教会の信者を信じてものを言っているわけです。

●愛の光

5 **それ汝等はみな光の子ども昼の子供なり。我らは夜に属く者にあらず、**

今日は題に「光の子」と出した。ヨハネ伝の第1章のところにあるように、

「之に生命あり、この生命は人の光なりき。」（ヨハネ1・4）

「もろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり。」（ヨハネ1・9）

「言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして恩恵と真理にて満てり。」（ヨハネ1・14）

と書いてある。栄光は光です。字そのものは違いますけれども、同じ内容です。

「キリストが我々の光だ」

という。

「汝らは世の光なり」

とキリストが言われたのは、我々はキリストをうちに宿さなければ、御霊のキリストを宿さなければ、光ではあり得ない。

「昼」という言葉は同時に「光」を表す。そのことはここに書いてある。

「光の子ども昼の子供なり」

と。昼と光とは同じことだ。

6 **されば他の人のごとく眠るべからず、目を覚して慎むべし。** 7 **眠る者は夜眠り、酒に酔う者は夜酔うなり。**

「目を覚していろ」なんて言われなくたって、光の世界にいれば目は自然に覚めている。

「**闇の中にいても神の光がある**」

と、旧約の中にもある。

「**我仆るれば興あがる幽暗に居ればエホバ我の光となりたもう。**」（**ミカ７・８**）

「闇の中でもエホバはわが光である」

と。我々にとっては、これはキリストです。キリストが光。しかも、その光は愛の光です。光の質は愛です。

●上から賜りたるもの

[8]されど我らは昼に属く者なれば、信仰と愛との胸当を著け、救の望の兜を
かむりて慎むべし。

自然に、パウロの言う「信・愛・望」の三つがこの言葉の中に出てくる。「信仰と愛と救の望」というと、

「信仰と愛と救の望の兜」

を自分で何かするように思うけれども、

「キリストの信、キリストの愛、キリストの終末的な望みを全部、上からのものとして受けとる」

ことでないと、本当は読めない。私はもう、「上からのもの」でなければ、力にならないんです、自分から何かやろうとしたって。信も望も愛も、信交の世界も全部、

「上から賜りたるもの」

です。完全に受け身で、こちらは何もない無者なんだ。十字架で無者にされているんだから。自分を何者ともしない者にされている。そこにキリストの信が入ってくる、愛が入ってくる、望みが入ってくる。

「信仰と愛との胸当を著け、救の望の兜をかむりて慎むべし」

なんていう、パウロのそんな言い方は私はあまり好きでない。みんな、これは苦しくなるよ、

「そうか、それでは慎んでいなければいかんな」

なんて。慎むのではなくて、平伏して、いただくんだ。平伏して、そういう信も望も愛もいただく。我々の魂の姿は平伏しなんです。魂の姿が平伏しのところには凄いものが上から来る。いいですか。

私は「実存」ということを言ったって、そういう意味の実存です。実存せしめられるので、いわゆる哲学的な実存とは違うんですから。こういうような言い方をすると、或る大きなグループの人たちには分からない。非常にこちら側からの熱心が、いわゆる人間的な熱心が強いものだから。

私は人間的な熱心は要らないんだ。

「神の熱心これを為したもう」

という。キリストの熱心がこれを為したもう。そのかわり、受けとる態勢は平伏(ひれふ)しです。いい加減でいるのではない。自分を投げ出している。

「平伏す」

と言おうが、

「キリストの中に投げ出す」

と言おうが、どっちでもいい。

「己を棄てる」

と言ったって、キリストの中に自分を棄てなければ。一番無力なようで、情けないようで、どっこいそうじゃない。一番烈々たるものが動いているんです。

賀川さんのお弟子さんの、升崎(ますざき)（父 真一、息子 外彦(とよひこ)）という方は素晴らしい人だ。

『新羅からキリストへ――荒野に水が湧く――ぞうり履きの伝道者升崎外彦物語』（１９４１年、救世軍出版部）

という本を読むと、参るよ。こういう真似はできません。真似する必要はないけれども、この魂の質は非常に共感していかなければダメです。

●聖霊漬け

9それ神は我らを怒に遭(あわ)せんとにあらず、主イエス・キリストに頼りて救を得させんと定め給えるなり。10主の我等のために死に給えるは、我等をして寤(さ)めおるとも眠りおるとも己と共に生くることを得しめん為なり。

もちろん、そうです。

あとは、何とかかんとかいろんな事が書いてある。教会のいろんな在り方、こういうことは私は面倒臭くてきらいなんだ。それは、パウロは懇ろに言っているから、けなすわけではありません。

11この故に互いに勤めて各自の徳を建つべし、これ汝らが常に為す所なり。12兄弟よ、汝らに求む。なんじらの中に労し、主にありて汝らを治め、汝らを訓戒する者を重んじ、13その勤労(はたらき)によりて厚く之を愛し敬え、また互に相和(やわら)ぐべし。14兄弟よ、汝らに勧む、妄(みだり)なる者を訓戒し、落胆(きおち)せし者を励し、弱き者を扶(たす)け、凡ての人に対して寛容なれ。15誰も人に対し悪をもて悪に報いぬように慎め。ただ相互(あいたがい)に、また凡ての人に対して常に善を追い求めよ。

「善意」ということは非常に大事なことです。すべて善意をもってすること。何事にも善意をもってする。何か批判するのでも、批判の中に善意がなければダメです。

16常に喜べ、17絶えず祈れ、

「常に喜ぶ」ためには、キリストの中にいなければ、常に喜べない。

「絶えず祈れ」

とは、

「祈り心でいろ」

ということです。私の祈りは簡単で、

「主さま！」

だけだ。ただ、「主さま！」と。あとは絶言絶慮。

18 **凡てのこと感謝せよ、これキリスト・イエスに由りて神の汝らに求め給う所なり。**

プラスもマイナスもみんな、主に在っては感謝になってしまう。

19 **御霊を熄すな、**

そのとおり。聖霊がいなくなったら、おしまい。聖霊漬けになっていないとね、漬物みたいに。とにかく、力がなくなったら、それは聖霊がないことです。必ずそれぞれの方々の、それぞれの歩き方の中に、力が、天来の力がきていれば、それは聖霊がある。

「福音は言葉にあらず、力なり」

とパウロが言ったのはそのことなんだ。御霊が消えたらおしまいだ。ところが、聖霊という燈火は消えない。どんな嵐がきても、逆に光る。

●霊体を頂いて天界へ

20 **預言を蔑すな、**

日本に対しては、滅びの預言がきているね、こんなことをしていたのでは。神なき民主主義なんてものはダメだ。

私は『エン・クリスト』52号（１９９２年10月 秋季号）の最初の頁の「火の民」（召団讃歌A57 １９９２年８月23日作）という詩の第三節に、

「されど神なき　民主主義は
自由に責任なく　秩序なし
愛なき教育　義なき政治
かくていづこへ　落ちゆくや」

と書いた。

20 **預言を蔑すな、21 凡てのこと試みて善きものを守り、22 凡ての悪の類に遠ざかれ。**

23 **願くは平和の神、みずから汝らを全く潔くし、汝らの霊と心と体とを全く守りて、我らの主イエス・キリストの来り給うとき責むべき所なからしめ給わん事を。24 汝らを召したもう者は真実なれば、之を成し給うべし。**

これは非常にせっぱつまった終末的な言葉だ。

「霊と心と体」

パウロはこのことを他のところでも言っている。聖霊を受けるところの霊の世界と、キリストの心、賜りたる身体は渾然一体です。「渾」という字は「別つことのできない」という意味です。「霊・心・体」。我々の身体はいずれダメになるけれども、霊体をいただく。霊体を頂いて天界へいく。天界のことをスウェーデンボルグは霊視して、いろんなことを書いているけれども、あれはちゃんと霊体を戴いている。

●キリストの光

それで中心は「光の子」なんですが、旧約から「光」のことを話し出したらキリがない。賀川先生もイザヤ書が非常に好きで、

「イザヤ書を読むと、もう小説が流れるように書くことができる。自分の文学の源泉はイザヤ書だ」

と言っている。私もイザヤ書は非常に好きなんだ。旧約でどれを選ぶかと聞かれれば、文句なしにイザヤ書を選びます。イザヤ書では特に60章、

「1起きよ、ひかりを発て、なんじの光きたり、エホバの栄光なんじのうえに照出たればなり。2視よ、くらきは地をおおい闇はもろもろの民をおおわん、されどなんじの上にはエホバ照出たまいてその栄光なんじのうえに顕わるべし。3もろもろの国はなんじの光にゆき、もろもろの王はてり出るなんじが光輝にゆかん。」（イザヤ60・1～3）

これは旧約の世界ですから、エホバですけれども、そこに光という字が随分出てくる。これは我々にとっては全くキリストの光です。

旧約でいえば、イザヤ書一巻をじっくり読むことです。エレミヤもいいですけれども、無駄のないのはイザヤ書です。新約聖書は頭から終りまで大変なものだ。キリストの光で溢れている世界だから。これは救いの光、愛の光です。救いをもたらす光だから、皆さんは、そのようなキリストの愛の光でもって、どういう人にも何か影響を及ぼすようなことにならなくては。

「証しせよ」

というのは、

「証しせざるを得ず」

ということです。

この部屋には蛍光灯が光っているけれども、太陽の光には一切かなわない。太陽の光熱がなくなったならば、地球上のものはみな死んでしまう。

こんな大事な地球の自然を原爆の実験や何かで随分おかしくしてしまって、オゾン層もおかしくなってきたなんて、今騒いでいるけれども、結局は超大国、アメリカとソ連が一生懸命で原爆の実験をやったり、造ったりして、これが大マイナスになった。それを真似

ている二等国、三等国がいろいろあるわけだ。これが大マイナス。日本はそれを造らなかったことは非常に結構なことだ。しかし、政治家がそれだけの自信をもってものを言わない。政党争いをしてみたり、汚職事件を出したりして、政治家がまたなっちょらん。教育者がまたダメ。教育者が宗教心を持たないで本当の教育はできない。とにかく、もう望みがない。だから、望みはあなた方自身の中にある。キリスト者一人ひとりの存在の使命は、使命感は非常なものがある。

「千万人といえども我ゆかん」

というものを、あなた方は持っていなければ。キリストにあったら、何ものも恐いものはない。男でも女でも、年をとっていようが若かろうが、そんなことは関係ない。

そういう、棄身の立場で福音を証していたのが、この賀川さんで、また賀川さんのお弟子さん三、四人です。この人たちは本当のキリストの僕だ。とにかく、

「それぞれの在り方で、同じ精神でいかなければダメだ」

ということです。

●我々は光の子

「エホバはわが光わが救なり。われ誰をかおそれん。エホバはわが生命のちからなり。わが懼（おそ）るべきものはたれぞや。」（詩篇27・1）

光は即ち救いの光だから。一番先に創世記の所に、

「神光あれと言いたまいければ光ありき」（創世記1・3）

とある。創世記から黙示録まで、「光」の所を出したら大変だけれども。とにかく、光の世界で、我々は「光の子」だという。

「光の中心はキリストだ。それは愛の光で相手を助けて救ってしまう光だ」

ということです。黙示録にはおもしろいことが書いてある。

「22**われ都の内にて宮を見ざりき、主なる全能の神および羔羊（こひつじ）はその宮なり。23都は日月の照（じつげつ）すを要せず、神の栄光これを照し、羔羊はその燈火（あかり）なり。」（黙示録21・22～23）**

「神の栄光、羔が光であって、日月が照らす必要がない」

という。

「霊界の光はそこらの光と違う、ケタの違う光だ」

と、スウェーデンボルグも書いているけれども。

「24**諸国の民は都の光のなかを歩み、地の王たちは己が光栄を此処に携えきたる。25都の門は終日閉じず（此処に夜あることなし）26人々は諸国の民の光栄と尊貴（とうとき）とを此処にたずさえ来らん。」（黙示録21・24～26）**

とある。キリストの光は、どんな闇も、雨も、嵐も、これを消すことができない。本当の

燈台だ。我々はそういった燈台にならなくては。ひかりの台に。

エゼキエルという預言者がまた不思議な預言者です。第１章に非常に光のことが出ている。

「13**その生物（いきもの）の形はおこれる炭の火のごとく松明（たいまつ）のごとし。火生物の中に此彼（ここかしこ）に行き、火輝きてその火の中より電光（いなびかり）いづ。**」（**エゼキエル１・13**）

ヨハネの方がこの光の世界は楽に書いているね。ヨハネ伝には方々に出てきますから、光と生命と愛と。

そういうことで、

「私たちはいかなる雲もこれを消すことのできない光の子である」

という自覚をもって進んでいきます。

●詩「火の民」

召団讃歌A57「火の民」

（１９９２年８月23日作　中山晋平作曲「さすらいの歌」の曲で）

1　大和島根は　大海原を
　望む島国　火の山国（やまくに）
　到るところ　温泉（いでゆ）が湧くよ
　されば我らは　火の民よ

2　大和民族　選びの民よ
　国旗は日の丸　無比の旗
　されば光の　国民（くにたみ）なるぞ
　神の光を　身証すべし

3　されど神なき　民主主義は
　自由に責任（せめ）なく　秩序なし
　愛なき教育　義なき政治
　かくていづこへ　落ちゆくや

4　今や世紀の　終末（おわり）は近し
　世界平和は　空望（からのぞみ）
　十字架の愛　聖霊の火よ
　愛とこの火を　証しせん